レスリー・カーン著／東辻賢治郎訳（晶文社　2022年）『フェミニスト・シティ』

岡本優加子*

本書はフェミニズム地理学の観点から都市と女性あるいは周縁化されている人々をめぐる様々な問題を考察し、タイトルの通りフェミニスト・シティ、つまりフェミニズムの理論が実現された街づくりの可能性を論じている。

これまで都市は健常者でシスジェンダーの男性中心にデザインされてきた。著者はこれをジェイン・ダークの言葉を用いて「石に刻まれた家父長制」(24頁)と表現し、批判する。男性標準でデザインされた都市による問題は多岐に渡り、本書では1章から5章にかけてテーマ別にその問題が考察されている。そうして都市計画の立案や意思決定が男性に占められていることを批判しつつも、単に女性が意思決定に参画したとて全てを解決することはできない複雑な構造を描き出し、誰にとっても開かれた街の実現をどのように達成すべきかの議論が展開される。

まず各章の内容を簡単に整理する。序章では、近代から現代に至るまで女性にとって都市はどのような空間として存在しているかを概観し、本書の目的や問題意識を提示する。著者はフェミニズムの中でもインターセクショナリティ(交差性)の理論に基づいて本書の議論を展開しており、白人のシスジェンダー、異性愛者、健常者である著者自身の「特権性」は各章で繰り返し言及されている。つまり本書で言及されるフェミニスト・シティとは、単に女性に開かれた都市を意味するのではなく、先住民や障害者、トランスジェンダーやその他のマイノリティーといったあらゆる周縁化された人々に開かれている都市を指す。

1章は妊娠した女性あるいは子を育てる女性と都市の関わりを扱う。都市の形態や機能は「夫および父親として一家の収入を稼ぐ、健常な体をもった、ヘテロセクシュアルで白人でシスジェンダーの男性」(53-54頁)向けにデザインされている。都市で起こるジェントリフィケーション(低収入層の生活地域が中産階級世帯や商業施設に変わるプロセス)もこの男性中心的デザインを根本から変える契機にはなっておらず、女性が担わされる子育てやケア労働は都市において蔑ろにされ続けていることが指摘される。

2章では都市に暮らす女性のサバイブにおける女性間の繋がりの重要性が主張されている。前半では映画や著者の経験を軸に少女と都市の関係に焦点が当てられ、後半はクィア女性も含む女性間の友情が都市におけるセーフティーネットとして機能していることが示される。異性愛や家父長制という伝統的家族観が規範性を失いつつある現代において、女性間の友情には感情の分かち合いだけでなく、子育てや介護などケア労働のシェアという実際的な支え合いが見られる。一方で現在の都市計画や行政はその関係性の維持や拡大に寄与できていないことも指摘されている。

3章は都市における女性のパーソナルスペースがテーマだ。歴史上、女性は男性の所有物として認識されてきたことがヴィクトリア朝時代にまで遡って言及され、現代でも女性が一人で都市の公共空間にいる権利が理解されていないことがレイプカルチャーとの関連で鋭く指摘される。また本章では、公衆トイレという空間がジェンダーやセクシュアリティ、階級や人種などあらゆる問題を浮き彫りにする場所として議論されている。

4章では抗議活動に積極的に参加している著者ならではの視点で都市の姿が描き出され

*東京大学大学院　総合文化研究科

DOI：10.24567/0002003783

る。都市は社会・政治的運動を行う舞台であり、同時に女性や周縁化された人々の闘う目的そのものである。女性がこうした活動に参加することに纏わる困難や、運動内部に存在するジェンダー区分や障害者差別にも触れつつ、アクティヴィズムの重要性を主張し、フェミニスト・シティとアクティヴィズムの役割について考察する。

5章は女性の恐怖心をテーマにしている。女性の抱く恐怖心とは非合理的なものでも生物学的に自然なものでもなく、社会的に強化されてきたものである。そしてそれは、女性が都市のリソースを活用して自由に生きることを妨げている。これに対してフェミニストや活動家たちは、女性および周縁化された集団の都市空間に対する権利を主張するキャンペーンを展開し、より安全でより恐怖を緩和できる街への変革を実現してきた。ただし著者は、環境デザインで達成できることの限界も指摘している。

さて、本書の特色の一つは「母」「友情」「運動家」など各テーマに関連して著者自身の体験談にページ数が多く割かれていることだろう。それは単に読みやすさだけでなく、生きた経験に基づく主張の迫力にも繋がり、これによって『フェミニスト・シティ』は幅広い読者の共感を呼ぶことに成功しているように思われる。

また、著者の「特権性」の自覚とインターセクショナリティの視点も読者の裾野を広げることに貢献している。本書が目的の一つとして掲げるフェミニスト・シティ実現のための開かれた議論の場づくりはこれによって成し遂げられていると言えるだろう。

実はこの書評を執筆している私自身、フェミニズム研究の専門家ではない。専門は都市在住のマイノリティーを対象とした文化人類学であり、この書評を執筆することになった際も門外漢に何が書けるだろうかと悩んだほどである。しかし読み始めてすぐ、その悩みは無用のものとなった。著者は都市において周縁化されているあらゆる人々に通じる問題を丁寧に考察しており、さらに都市開発の問題にも焦点を当てている。つまり本書ではフェミニズム研究、マイノリティー研究、そして都市論の交差する議論が展開されているのである。

裏を返せば、あらゆるコミュニティーが参画して考えねばならない問題が現代の都市に山積しているということでもある。しかし多様な人びとの間の利益を両立させることは容易いことではない。例えば3章では、労働者階級の住宅地が「女性向き」にジェントリフィケーションされることで「中流階級の白人女性」の安全性の向上が図られる一方、経済的に貧しい人々や障害をもつ人々の過ごす場所が奪われることになった事例が示される。また、著者も主張するように都市における社会問題は複雑な背景によって起きており、単に都市の設計や開発を見直したところで一挙に解決されるわけではない。

このように本書は都市の女性をめぐる問題解決に関する具体的な回答を提示しているわけではなく、ともすれば課題の列挙に終始しているようにも見える。だが、4章で主張されているように、社会の変革は何らかの異議申し立てがあって初めて起こるのだ。そして様々なアイデンティティーを持つ多様なカテゴリーの人々が都市計画に参画し、対話を通して問題解決を考え続けることが、現代都市の生きづらさを解消するための可能性なのである。フェミニズム研究者に留まらず多くの人に読まれてほしい良書であった。